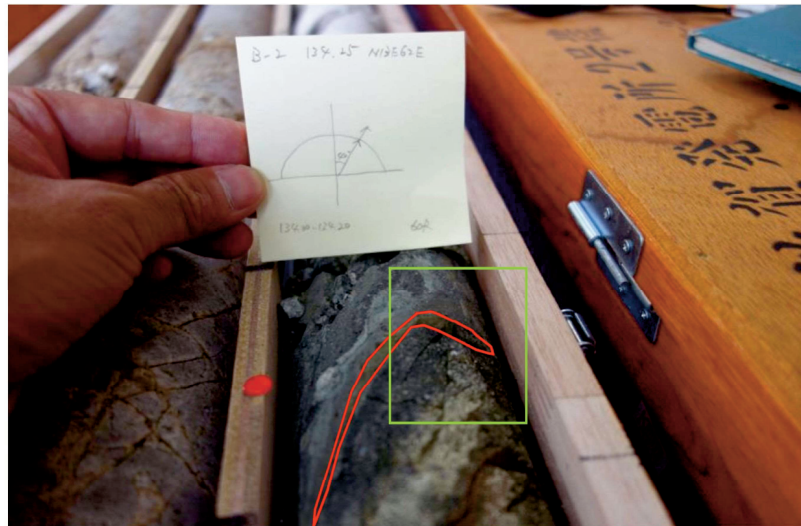


H27-B-2 深度134.15~134.23m 最新活動面の走向・傾斜 (No.79) に基づき条線方向 (No.80) を変更

- 条線観察時の写真より、最新活動面で条線観察を行っていることを確認した。

コア写真



□ : 条線観察位置

H27-B-2 深度152.10~152.15m 全景写真の記載 (No.81) の修正

従前

見直し後

第833回審査会合

机上配布資料1

敦賀発電所2号炉 敷地の地形、地質・地質構造について

参考資料1 薄片観察結果

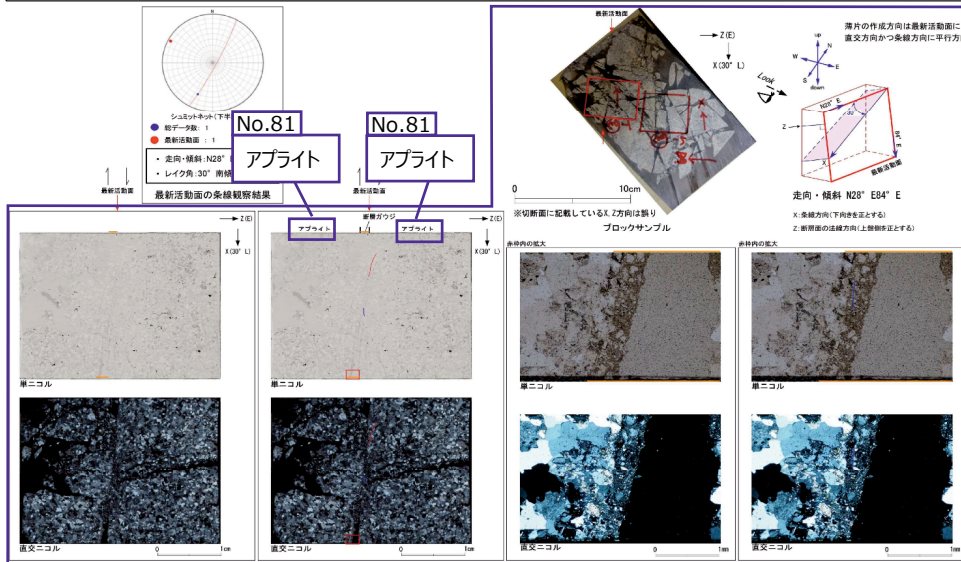
参考1-186頁

第833回審査会合 机上配布資料1に追記(青太枠)

(No.1126-5で説明)

f-b-2-21破砕帯 薄片試料観察(H27-B-2 深度152.11m)

H27-B-2のボーリングコア(深度152.11m)から採取した薄片試料の観察結果によれば最新活動面の変位センスは **右ずれを伴う正断層である**

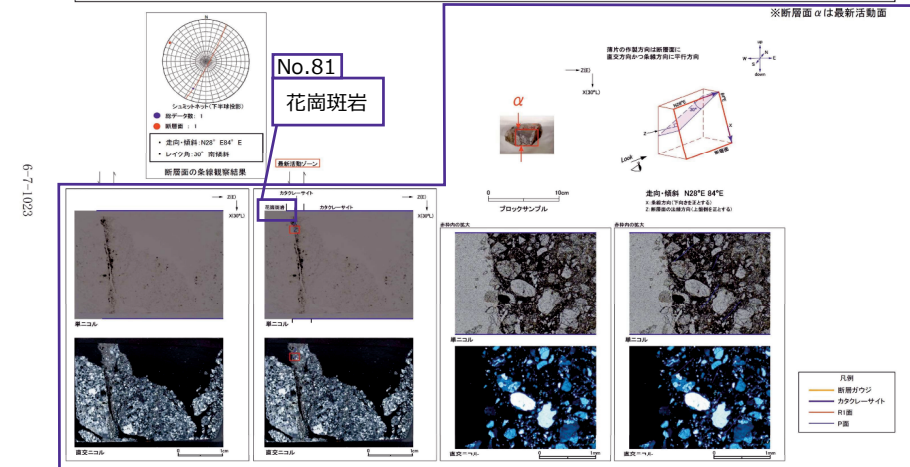


(No.1126-5で説明)

参考1-186

(No.1126-5で説明)

・H27-B-2のボーリングコアから採取した薄片試料の観察結果によれば最新活動ゾーンの変位センスは **左ずれを伴う逆断層成分が卓越する**
 ・最新活動ゾーンに以下の特徴が認められることから、カタクレーサイトのみからなる破砕部であると判断した。
 > (カタクレーサイト)基質を構成する粘土鉱物は認められない。
 > (カタクレーサイト)多様な粒径の岩片が多く認められる。
 > (カタクレーサイト)角ばった岩片が多い。
 > (カタクレーサイト)岩片の粗界を横断する破断面が認められる。
 > (カタクレーサイト)ジグソー状の角縁群が認められる。



第7.4.4.300図(3) 破砕部性状 H27-B-2 深度152.10~152.15m (変位センス, 薄片観察による断層区分(1/3))

(No.1126-5で説明)

1. 変更内容、理由及び断層連続性評価への影響

・走向・傾斜をN21W21Eに見直し (No.82)

【理由】BHTV画像が取得できなかったことから、既知の破碎部から当該破碎部の姿勢を再現することによって、当該破碎部の最新活動面の走向・傾斜を取得した

・条線方向を17Rに見直し (No.83)

【理由】走向・傾斜の見直し (No.82) により、基準方位が変わることに伴う変更

・変位センスを右ずれセンスに見直し (No.84)

【理由】走向・傾斜 (No.82) 及び条線方向 (No.83) の変更により、条線方向が低角度に変更となることに伴う変更

【断層連続性評価への影響】あり

・破碎帯名を非モデル化に見直し (No.85で説明)

【理由】走向・傾斜 (No.82)、条線方向 (No.83)、変位センス (No.84) の見直しに伴い、破碎部の連続性を再評価した結果による

2. 変更箇所

a 走向・傾斜を「N21W21E」に変更 (No.82)

b 条線方向を「17R」、レイク角を「17°北傾斜」に変更 (No.83)

c 変位センスを「右ずれ -」に変更 (No.84)

d 見直し後の走向・傾斜、条線方向に基づく図に変更 (No.82,83)

e 変位センスを「右ずれ」に変更 (No.84)

f 見直し後の走向・傾斜、条線方向に基づきブロックサンプル写真・薄片資料写真を上下左右反転 (No.82,83)

H24-B14-2 深度49.24~49.55m 最新活動面の走向・傾斜 (No.82) を変更、それに伴い条線方向 (No.83) ・変位センス (No.84) を変更、
 破碎帯名 (No.85) を見直し

従前

見直し後

第833回審査会合

机上配布資料2

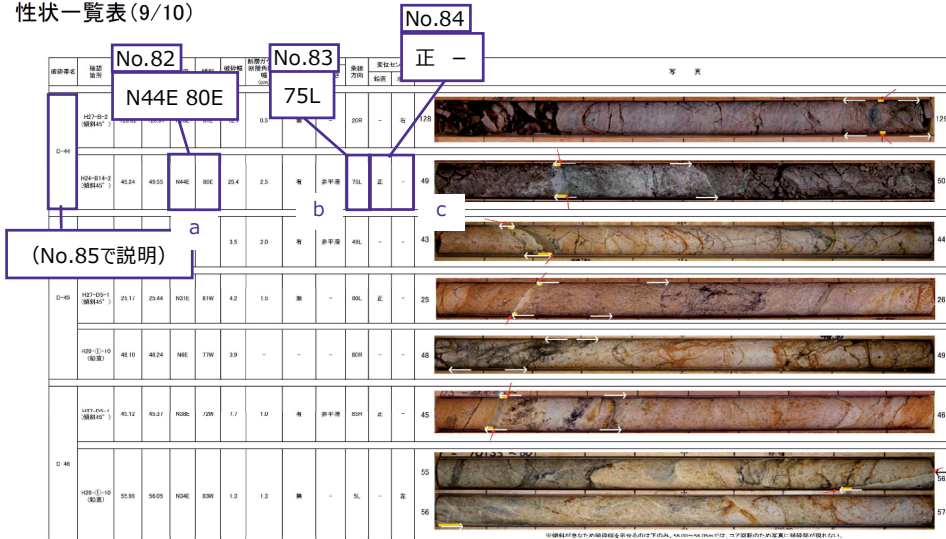
敦賀発電所2号炉 敷地の地形、地質・地質構造について

参考資料2 性状一覧表

参考2-115頁

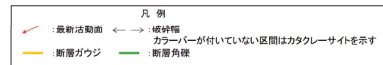
第833回審査会合 机上配布資料2に追記 (青太枠)

10. D-29~D-47 破碎帯
 性状一覧表 (9/10)



破砕帯名	深度 (m)	走向 (度)	傾斜 (度)	変位 (mm)	変位センス	性状		備考
						性状	備考	
H24-B14-2 (No.82)	49.24	80E	80E	2.3	非半滑	75L	正	
H24-B14-2 (No.83)	49.33	75L	75L	2.3	非半滑	75L	正	
H24-B14-2 (No.84)	49.41	49L	49L	2.0	非半滑	49L	正	

※1 断層帯区分の総合評価に基づき記載し、肉観「有」のうち総合評価「無」となる箇所は「-」を記載
 ※2 斜めボーリングの場合は、計測値を修正した値を記載
 ※3 信頼性低い成分については「-」を記載 (南成分「-」は薄片観察を行っていない箇所)
 「-」(上記以外)：データを取得していない箇所



【性状】
 粘土状破砕部、砂状破砕部、角礫状破砕部
 固結した粘土状破砕部、固結した砂状破砕部、固結した角礫状破砕部
 の含砂の順とし、破砕部の走向傾斜から真の順に換算した。

【半滑】
 半滑：最新活動面が直線的なもの
 非半滑：最新活動面が湾曲するもの

参考2-115

H24-B14-2 深度49.24~49.55m 最新活動面の走向・傾斜 (No.82) を変更、それに伴い条線方向 (No.83) ・変位センス (No.84) を変更

従前

見直し後

第833回審査会合

机上配布資料1

敦賀発電所2号炉 敷地の地形、地質・地質構造について

参考資料1 薄片観察結果

参考1-130頁

第833回審査会合 机上配布資料1(追記 (青太枠))

No.82 No.83

(走向・傾斜 : N44°E 80°E、
レイク角 : 75° 南傾斜
に基づく条線観察結果)

No.82 No.83

(ブロックサンプル写真)

No.84

正断層

No.82 No.83

(走向・傾斜 : N44°E 80°E、
レイク角 : 75° 南傾斜
に基づく模式図)

No.82 No.83

(走向・傾斜 : N21°W 21°E、
レイク角 : 17° 北傾斜
に基づく条線観察結果)

No.82 No.83

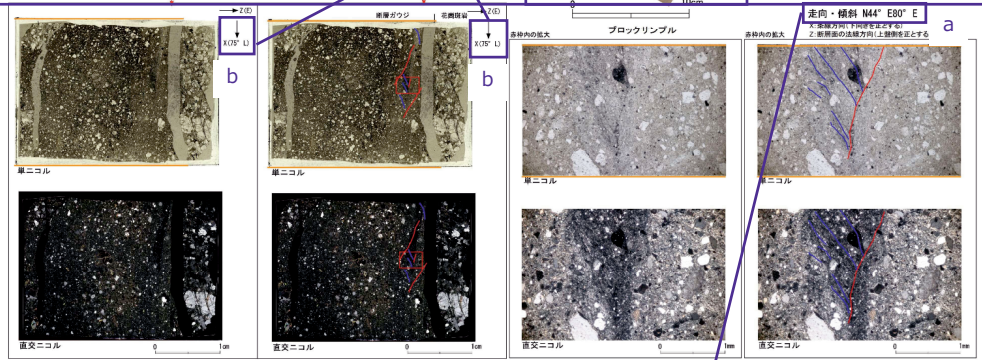
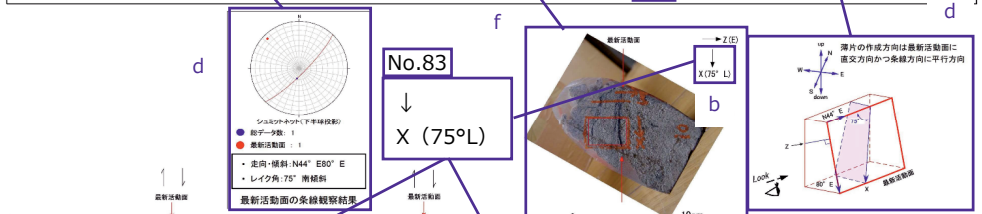
(ブロックサンプル写真を上下左右反転)

No.82 No.83

(走向・傾斜 : N21°W 21°E、
レイク角 : 17° 北傾斜
に基づく模式図)

D-44破砕帯 薄片試料観察 (H24-B14-2 深度49.26m)

H24-B14-2のボーリングコア(深度49.26m)から採取した薄片試料の観察結果によれば最新活動面の変位センスは、正断層成分が卓越する。



凡例
 赤線 断層ガウジ
 青線 カタクレーサイト
 黒線 P1面
 黒線 P2面

No.82 No.83

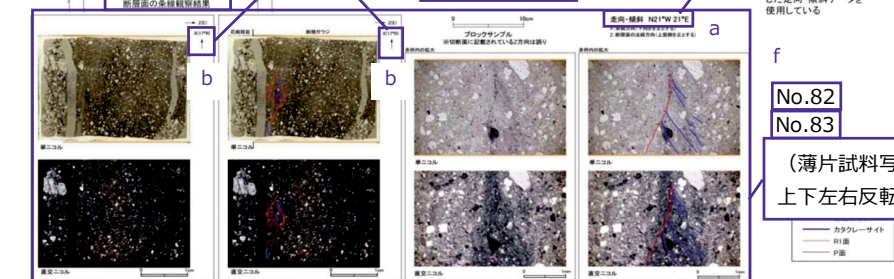
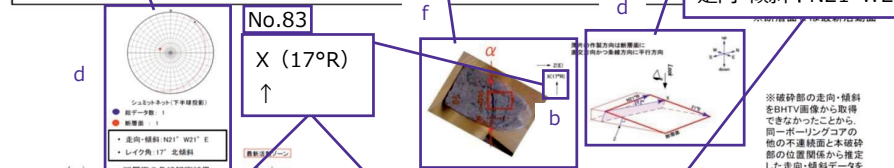
(薄片試料写真)

No.82

走向・傾斜 : N44°E80°E

参考1-130

・H24-B14-2のボーリングコアから採取した薄片試料の観察結果によれば最新活動ゾーンの変位センスは、右ずれ成分が卓越する。
 ・最新活動ゾーンには、断層ガウジとカタクレーサイトの特徴が認められるが、カタクレーサイトの特徴は、カタクレーサイトが断層ガウジに取り込まれたものと考えられることから断層ガウジと判断した。
 ・(断層ガウジ) 基質は粘土鉱物を主体とする。
 ・(カタクレーサイト) 組織は周囲と漸移的である。
 ・(カタクレーサイト) 角ばった岩片が多い。
 ・(カタクレーサイト) 岩片の粒界を横断する破断面が認められる。
 ・(カタクレーサイト) シンゾウ状の角礫群が認められる。



※破砕帯の走向・傾斜をHTV画像から取得できなかったことから、同一ボーリングコアの他の不連続面と本破砕帯の位置関係から推定した走向・傾斜データを使用している

No.82

No.83

(薄片試料写真を上下左右反転)

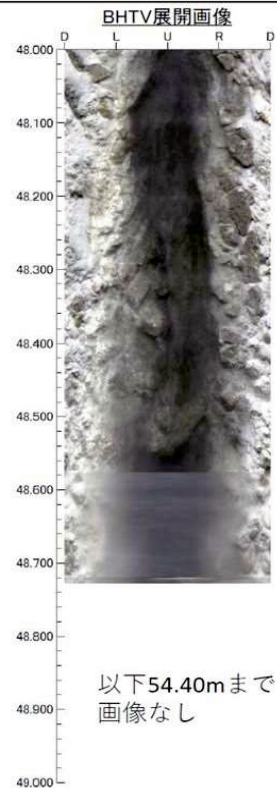
凡例
 赤線 カタクレーサイト
 青線 P1面
 黒線 P2面

BHTV画像が取得できなかったことから、既知の破砕部から当該破砕部の姿勢を再現することにより、当該破砕部の最新活動面の走向・傾斜 (No.82) を見直し

- 従前提示していたデータでは、性状一覧表及び薄片観察結果にN44E80Eと記載していたが、以下のとおり、走向・傾斜をN44E80E からN21W21Eに変更した。
- BHTV画像を確認したところ、孔壁崩壊により最新活動面 (深度49.26m) の走向・傾斜が取得できていなかったため、走向・傾斜を取得できた割れ目 (深度47.40m, N38E85NW) を用いて、その割れ目と最新活動面のコアにおける姿勢から最新活動面の走向・傾斜をN21W21Eと推定した。
- 従前提示していたデータは、当該破砕部をK断層と同様な高角度傾斜であると仮定し推定した結果を用いていた。

ボアホールカメラ展開画像との対比結果 (H24-B14-2 深度49.24~49.55m)

・H24-B14-2 深度49.24~49.55mの破砕部の最新活動面の走向・傾斜は、孔壁の崩壊で画像が撮影できなかったことから測定できなかった。



BHTV画像が取得できなかったことから、既知の破砕部から当該破砕部の姿勢を再現することにより、当該破砕部の最新活動面の走向・傾斜 (No.82) を見直し

- BHTV画像を確認したところ、孔壁崩壊により最新活動面 (深度49.26m) の走向・傾斜が取得できていなかったため、走向・傾斜を取得できた割れ目 (深度47.40m, N38E85NW) を用いて、その割れ目と最新活動面のコアにおける姿勢から最新活動面の走向・傾斜をN21W21Eと推定した。

H24-B14-2孔 49.26mの破砕部(最新活動面)の走向傾斜について



1. 当該破砕部については、BHTV撮影前に孔壁が崩壊しBHTV画像が取得できなかったことから、2. に示す方法によって、当該破砕部の最新活動面における走向・傾斜を取得した。

2. 走向・傾斜の取得方法

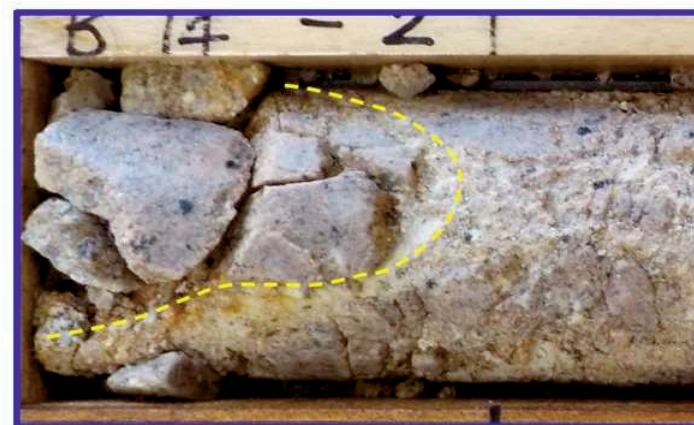
走向・傾斜が既知の破砕部から当該破砕部の姿勢を再現することによって、当該破砕部の最新活動面の走向・傾斜を取得することとした(コアが端部で回転している場合は、割れ目などの性状から元の姿勢を再現した)。

なお、走向・傾斜が既知の破砕部は、当該破砕部の約2m上位の破砕部(深度47.40m)とした。

BHTV画像が取得できなかったことから、既知の破砕部から当該破砕部の姿勢を再現することにより、当該破砕部の最新活動面の走向・傾斜 (No.82) を見直し

- コア端部 (深度48m) の繋がりは、連続すると思われる割れ目を基準にして確認した。

H24-B14-2孔 49.26mの破砕部(最新活動面)の走向傾斜について
(深度48mのコア端部の繋がりを)

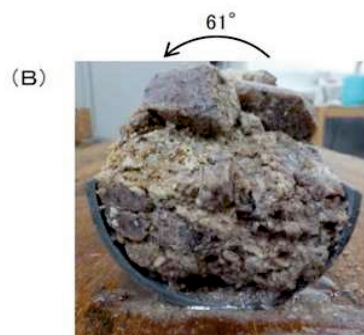
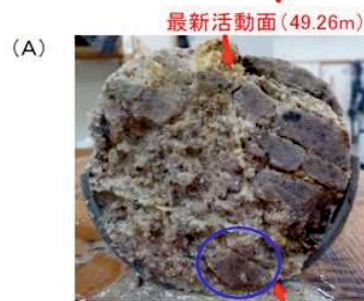
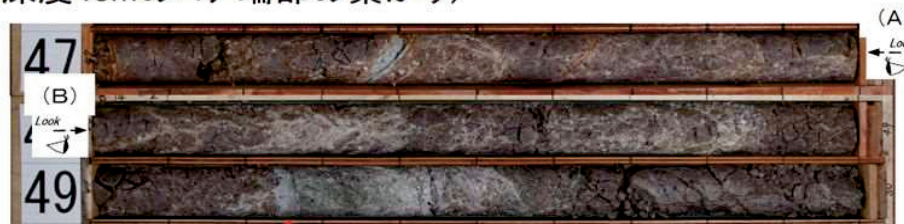


- 健岩部と変質部の分布や境界面から、黄色破線部が連続すると考えられる。

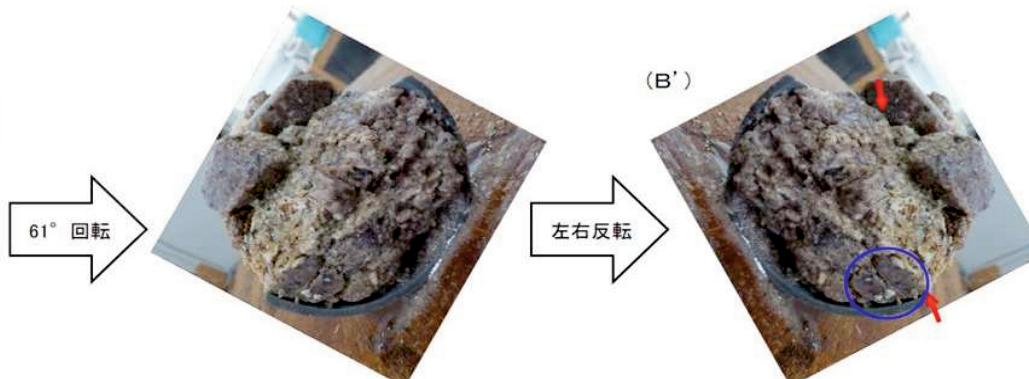
BHTV画像が取得できなかったことから、既知の破砕部から当該破砕部の姿勢を再現することにより、当該破砕部の最新活動面の走向・傾斜 (No.82) を見直し

- コア端部 (深度48m) の繋がりは、連続すると思われる割れ目を基準にして確認した。

H24-B14-2孔 49.26mの破砕部(最新活動面)の走向傾斜について
(深度48mのコア端部の繋がり)



- コアの切り口を対比するため、(B)の画像を61°回転させた後、左右反転させた(B')。
- (A)と(B')は、割れ目位置(赤矢印)や健岩部の分布(青枠)が対応している。



BHTV画像が取得できなかったことから、既知の破碎部から当該破碎部の姿勢を再現することにより、当該破碎部の最新活動面の走向・傾斜 (No.82) を見直し

- ・コア端部 (深度49m) の繋がりは、連続すると思われる2方向の割れ目を基準にして確認した。

H24-B14-2孔 49.26mの破碎部(最新活動面)の走向傾斜について
(深度49mのコア端部の繋がりに)

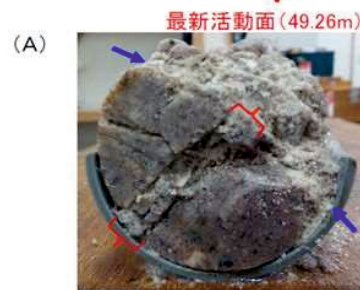


- ・コアの表面からは、コア同士の対比関係は不明である。

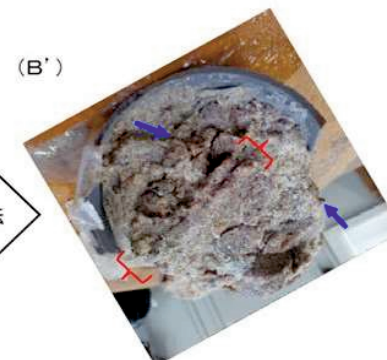
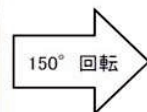
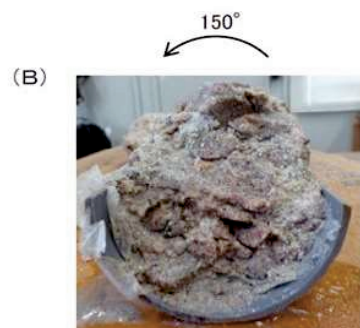
BHTV画像が取得できなかったことから、既知の破砕部から当該破砕部の姿勢を再現することにより、当該破砕部の最新活動面の走向・傾斜 (No.82) を見直し

- コア端部 (深度49m) の繋がりは、連続すると思われる2方向の割れ目を基準にして確認した。

H24-B14-2孔 49.26mの破砕部(最新活動面)の走向傾斜について
(深度49mのコア端部の繋がり)



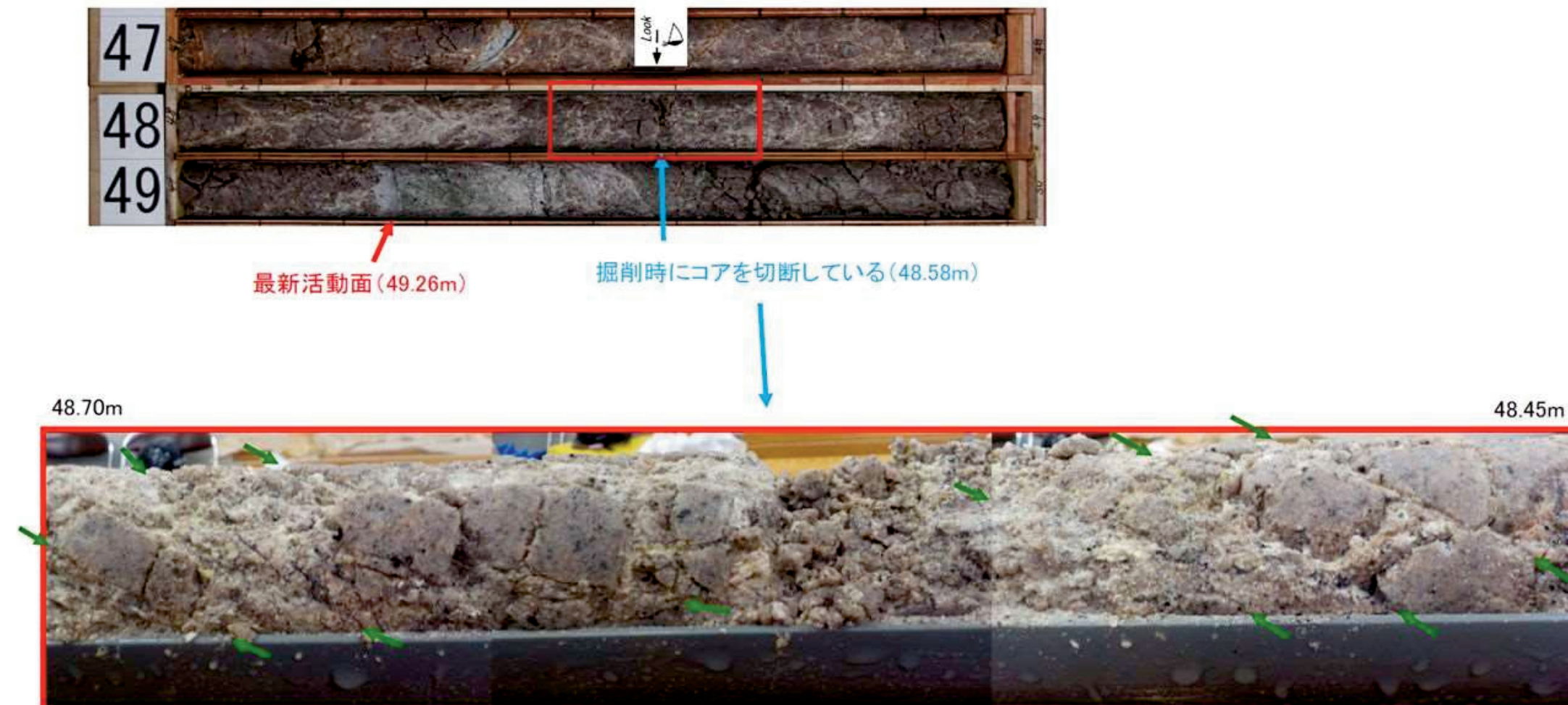
• コアの切り口を対比するため、(B)の画像を150°回転させた後、左右反転させた(B')。
• (A)と(B')は、紙面上左下がりの構造の分布(赤枠)や、これに斜交する構造(青矢印)が対応している。



BHTV画像が取得できなかったことから、既知の破碎部から当該破碎部の姿勢を再現することにより、当該破碎部の最新活動面の走向・傾斜 (No.82) を見直し

- コア切断部 (深度48.58m) の繋がりには、連続すると思われる右下がりの割れ目の構造を基準にして確認した。

H24-B14-2孔 49.26mの破碎部(最新活動面)の走向傾斜について
(深度48.58mのコア切断部の繋がり)



- ・48.58m付近で、掘削時にコアを切断している。
- ・48.58m前後のコアでは、紙面上右下がりの構造(緑矢印)が同様に連続していることから、48.58mを境にコアは回転していないと判断した。